

筑後国府跡

—第247次発掘調査報告—



平成 24 (2012) 年 7 月

久留米市教育委員会

序

久留米市は筑後平野の中心付近に位置し、耳納山地の緑と筑後川の水など、豊かな自然に恵まれています。平成17年2月の広域合併後、平成20年4月には中核市となり、福岡県南地域の中心都市として発展しています。このような久留米市の発展を築き上げてきた先人達は、多くの文化を創造し、市内各所にはその足跡である歴史遺産が多く残されています。

本書で報告する筑後国府跡は、現在にいたる久留米市発展の礎となった古代の行政機関で、1961年に全国に先駆けて国府政庁における発掘調査が九州大学によって行われました。1972年以降は本市教育委員会が継続して調査を実施しており、長年の調査成果は全国の官衙研究に新たな情報を発信し続けています。今回の調査では、筑後国府が盛行した奈良～平安時代と、その後の中世の遺構・遺物を中心に多くの成果が得られました。

今回の発掘調査とその成果を収録した本書の発行によって、地域の歴史解明、さらに文化財保護の理解や普及、歴史学習等に多少なりとも貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査・本書の発行に際しまして、多大なご理解のもとにご協力を頂きました■■■■氏や関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成24年7月31日

久留米市教育委員会
教育長 堤 正 則

例 言

1. 本書は、宅地造成に先立ち■■■■氏の委託を受けて実施した、筑後国府跡第247次調査の発掘調査報告書である。
2. 本調査に係わる事務並びに調査は久留米市教育委員会が調査主体となり、久留米市市民文化財文化財保護課の神保公久が担当した。
3. 本書に掲載した遺構実測図の作成は、神保・田中樹子・榎原初美・藤木幸子・丸山 幸・渡辺しげ子が行った。また、本書に掲載した遺物の実測は、非常勤職員の米澤美詠子が行い、図面の浄書は神保と米澤が実施した。
4. 本書に掲載した遺構写真は、マミヤRB67を用いて6×7判で神保が、遺物写真は当課の坂本映子が撮影した。また、本文中の遺物番号と写真図版の遺物番号は同一である。
5. 遺構実測図は国土調査法第Ⅱ座標系（旧座標系）を基に作成し、図面の方は座標北を示す。
6. 本調査の略記号はTKH247、調査番号は201112である。
7. 本調査に関わる遺物・記録類は、全て久留米市埋蔵文化財センターに収蔵・保管されている。
8. 遺物観察表の凡例は下記のとおりである。
口径（長）・底径（幅）・器高（厚）の単位はcmである。（ ）内の数値は現存または復元値を示す。
色調は『新版標準色帖』（日本色研事業株式会社 1997年版）による。
登録番号は、久留米市市民文化財文化財保護課が定める出土遺物の登録番号である。
9. 本書の執筆・編集は神保が担当した。

本文目次

I. はじめに	1
II. 筑後国府跡の立地と概要	2
III. 調査の記録	4
IV. 総括	16

I. はじめに

1. 調査に至る経過

本調査は、宅地造成に伴う事前の発掘調査である。平成23年9月5日、[]氏より久留米市合川町字広野168番1における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。当該地一帯は、周知の遺跡である筑後国府跡に含まれる。周辺では、第173次調査、第197次調査、第198次調査、第212次調査、第218次調査、第243次調査、第244次調査が実施されている。これらの調査では、奈良～室町時代にいたる多くの遺構群が検出されている。これらの中で、対象地北部分において筑後国府城を東西に走行する官道が検出される可能性が高いことが想定された。その後、確認調査で溝やピットが検出されたことから、造成地内の道路建設予定地について発掘調査が必要である旨を回答した。協議の結果、調査費用を原因者負担とし、9月16日に地権者から「発掘調査の依頼」が提出されたのを受け、文化財保護法による諸手続きを済ませた後、平成23年10月5日に[]氏と久留米市久留米市長榎原利則は「筑後国府跡第247次調査埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を取り交わした。現地調査は、平成23年10月11日から11月11日で実施、出土品整理・報告書作成に係わる契約は平成24年5月1日から7月31日までである。

2. 調査に係わる体制（平成24年度一報告書作成分）

調査委託：[] []

調査主体：久留米市教育委員会 教 育 長：堤 正則

調査総括：市民文化部 部 長：辻 文孝 次 長：佐藤 光義

文化財保護課 課 長：古賀 正美 課長補佐：園井 正隆

課長補佐兼課主査：宮崎 俊一

課 主 査：白木 守 辻 義則

庶務担当：豊福 早苗

調査担当：神保 公久 整理担当：米澤美詠子

発掘調査臨時職員

執行 弘子・高尾 泰代・田中 樹子・永富 敏明・榎原 節子・榎原 初美・藤木 幸子
丸山 幸・迎 直樹・由布 幸子・渡辺しげ子・渡辺やつ子

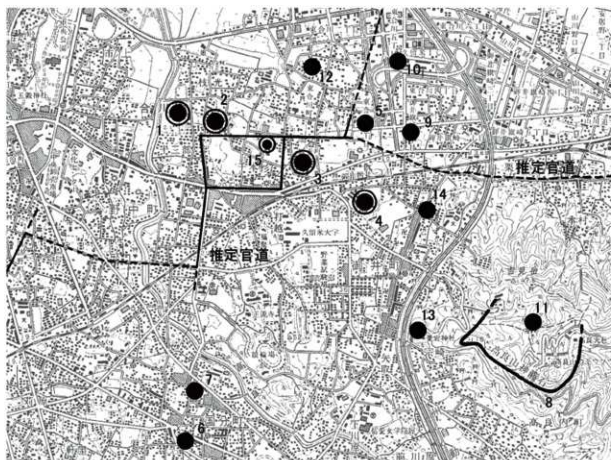
発掘調査整理臨時職員

永淵笑美子

Ⅱ. 筑後国府跡の立地と概要

1. 地理的環境

筑後国府跡の位置する久留米市は、九州最大の穀倉地帯である筑後平野の中央に位置し、交通の要衝として発展してきた。筑後平野の南側には耳納山地が連なり、その西端には延喜式内社である高良大社が鎮座する高良山（312.3m）が聳える。ここから北西に派生する低位段丘上に筑後国府跡は立地し、東西1.0km、南北0.7km程度の範囲に展開している。現在の久留米市街地の東方約1.6km付近である。筑後平野には阿蘇外輪山に源を発した筑後川が西流し、久留米市付近で南西に方向を変え有明海に注ぐ。筑後国府跡の北側には筑後川が流れ、国府の選地は筑後川の水運と地理的立地の利便性に起因しているものと考えられる。国府の立地する枝光台地の南端には、水縄断層系千本杉断層が東西に伸びており、この断層によって形成された断層崖下には湧水がいくつも見られる。国府の西側は高良山南麓に源を発した高良川が北流し、東側には中谷川が流れ、北の筑後川と南の断層崖によって、筑後国府城は画されている。



第1図 筑後国府跡の位置と周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

1. 筑後Ⅰ期政庁 2. 筑後Ⅱ期政庁 3. 筑後Ⅲ期政庁 4. 筑後Ⅳ期政庁 5. ヘボノ木遺跡
6. 筑後国分僧寺跡 7. 筑後国分尼寺跡 8. 高良山神籠石 9. 神道遺跡 10. 下見遺跡
11. 高隆寺跡 12. 西小路遺跡 13. 祇園山古墳 14. 二本木遺跡 15. 第247次調査地

2. 筑後国府の概要

筑後国が成立する以前の7世紀中頃、枝光台地西部部分の逆台形を呈する台地を囲むように、大溝や土塁が造営され、内部には多数の掘立柱建物群が営まれた（前身官衙）。高良川河畔の古宮地区には、筑後国が成立した7世紀末から8世紀中頃にかけて、築地塙で圍繞された掘立柱建物群からなる政庁が営まれている（Ⅰ期政庁）。その後、九州において律令体制が安定した8世紀中頃には、古宮地区から東へ約200mの阿弥陀地区に政庁が移転した。このⅡ期政庁は南北75m、東西67.5mを築地塙で圍繞し、9世紀前半には礎石建物が造営されている。西脇殿や政庁南前面の朝集殿的な建物群、政庁を圍繞する築地塙、大量の古瓦などが検出されている。この時期、政庁に付属する官衙群は枝光台地一帯に広がり、各官衙はそれぞれの単位毎に計画方位をもって造営される。特にⅡ期政庁の南東約200mには、浅い谷を挟んで9世紀代の国司館跡も確認されている。Ⅱ期政庁は10世紀前半に火災により焼失したと思われ、東へ約600mの朝妻地区に再び移転した。このⅢ期政庁は、幅約4mの大溝で区画された1辺約140mの区画を有し、内部では大規模な掘立柱建物群が検出されている。付属官衙群も併せて移動したと考えられ、政庁の東側に多数の官衙群が確認されている。さらに11世紀後半には南東約400mの横道遺跡へ移転したと考えられており（Ⅳ期政庁）、『高良記』にいう「今ノ符」とされるこの政庁は、12世紀後半頃まで存続したことが判明している。

第1表 筑後国府跡の変遷

	所在地	存続年代
前身官衙	久留米市合川町枝光台地一帯（中枢部：田代地区）	7世紀中頃～7世紀末頃
Ⅰ期政庁	合川町古宮地区	7世紀末頃～8世紀中頃
Ⅱ期政庁	合川町阿弥陀地区	8世紀中頃～10世紀中頃
Ⅲ期政庁	朝妻町三丁野地区	10世紀中頃～11世紀後半
Ⅳ期政庁	御井町横道地区	11世紀後半～12世紀後半



第2図 筑後国府跡第247次調査区全景（西上空より）

III. 調査の記録

1. 調査の目的と経過

調査地は、筑後国府跡Ⅱ期政庁に付随する国司館跡の北東側に位置する。前述したように周囲においては、第173・197・198・212・218・243・244次調査が実施されている。これらの調査では、8～14世紀代を中心に多くの遺構・遺物が検出されている。特に東側隣接地で実施された第212次調査地では、筑後国府城を東西方向に計画的に敷設された官道が約72mにわたって確認されており、その延長部が対象地の北部分で検出されることが予想された。また、北西隣接地で実施された第218次調査では、9世紀代の四面廂建物や官道に直行する道路遺構、堅穴建物などが検出されている。また、第197次調査では中世期の所産である通称「立石土塁」の測量調査などが実施されており、調査区周辺における遺構の密集度は非常に高い。今回はこれらの成果を念頭に置き、各時代の遺構群の広がりを確認することを目的とした。



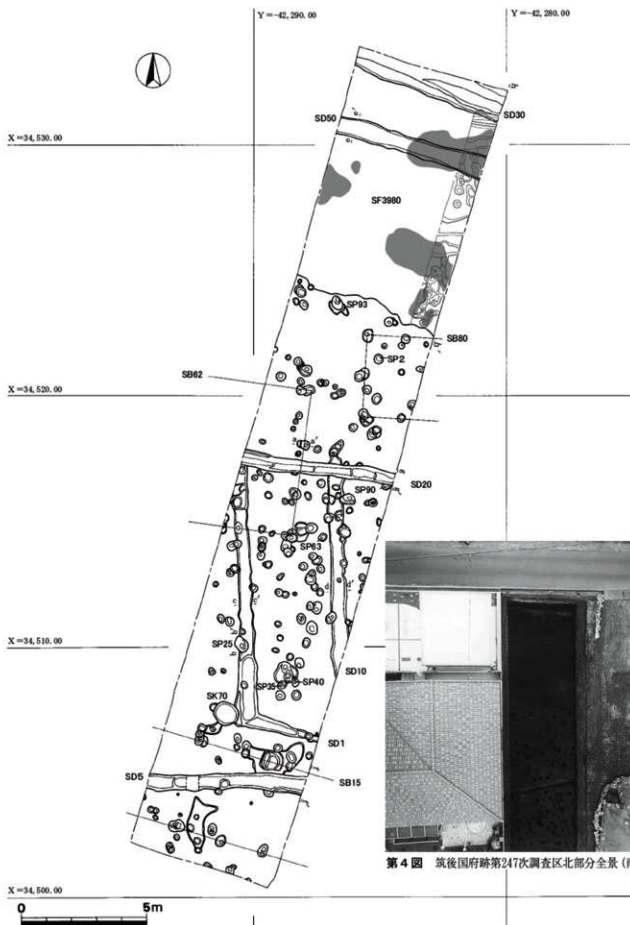
第3図 作業風景（南から）

現地調査は、平成23年10月11日に重機による表土剥ぎから開始した。表土を除去した部分から、作業員により遺構検出を実施し、平板測量による略図作成、終了した箇所より遺構掘り下げを開始した。遺構実測、写真撮影を並行して行い、全ての掘り下げ終了後に全体写真を撮影した。補足調査終了後に埋め戻しを行い、平成23年11月11日に全ての現地作業を終了した。個別遺構図と土層断面図（S=1/10）は手測りで作製し、それ以外の遺構実測はトータルステーションを用いておこなった。その記録は株式会社CUBIC製ソフト「遺構くんCubic」で編集・保管している。遺構の記録写真は、全体写真以外を神保がカラーリバーサル・モノクローム6×7判で撮影した。

2. 検出遺構

本調査地の周辺地形は、南東から北西側へ緩やかに傾斜している。対象地は水田として利用されてきたため遺構の攪乱は比較的少なく、残存状況は良好であった。基本土層は旧耕作土が0.2～0.3m、黒色の遺物包含層が約0.1～0.2mであるが、南側の標高が高い部分には遺物包含層は残存していない。遺構検出面である地山面までの深さは、調査北西側で約0.8m程度、南側では耕作土直下の約0.2m程度であり、地山面の傾斜により比高差が認められる。検出面の標高は北部分で約13.6mである。

検出遺構は、掘立柱建物3棟、溝6条、土坑1基、道路遺構1条、ピットなどである。国府城を直線的に敷設された道路遺構は、想定どおり調査区北部分で検出されている。ここでは、これらの主要遺構について報告する。



第4図 筑後国府跡第247次調査区北部分全景(南上空から)

第5図 筑後国府跡第247次調査遺構配置図 (1/150)

掘立柱建物

SB15



SB15

調査区の南部分で検出した。北・南側柱列が2間分(1.8m等間)検出できており、東西棟建物と思われる。東・西側柱列が調査区外に広がるために全容は不明であるが、桁行4間以上×梁間2間程度の建物と推定される。北側柱列と南側柱列の距離は約3.6mである。柱穴の平面形は、円・楕円形を呈し、直径・長軸長は0.3~0.5m、柱痕径は確認できたもので0.2m程度である。埋土は互層状に突き固めているものではなく、黒色系の砂質土に褐色系の砂質土が若干混入するものが多い。各柱穴の掘方埋土からは、土師器坏・壺・甕の細片、須恵器坏・甕の細片などが出土している。建物の計画方位はN-17°-Eである。

SB62 (第6・7図)



SB62

調査区の中央部、西壁沿いで検出した。後述するSD1と重複するが、SB62が先行する。建物の西側は調査区外へ広がるために詳細は不明であるが、東側柱列の南北3間分(6m)を検出した。柱穴の平面形は、円・楕円



第6図 SB62 P-1土層断面(南から)

形を呈し、直径・長軸長は0.3~0.5m、柱痕は確認できたもので直径0.2m程度である。埋土は黒褐色系の砂質土であり、各柱穴の掘方埋土からは、土師器坏・皿・壺・甕、黒色土器A類の細片、須恵器坏・壺・円面碗の脚部の細片などが出土している。建物の計画方位はN-8°-Eである。



SB80

SB80

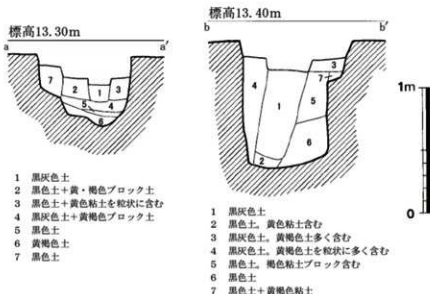
調査区の中央部、東壁沿いで検出した。前述したSB62の約2m東側に位置する。建物の東側は調査区外へ広がるために詳細は不明であるが、東側柱列の南北2間分(6.6m)を検出した。柱穴の平面形は、円・不整形を呈し、直径・長軸長は0.3~0.5m、柱痕径は確認できたもので0.2m程度である。埋土はSB62と同様に黒褐色系の砂質土である。各柱穴の掘方埋土からは、土師器蓋・坏・皿・甕の細片が出土している。建物の計画方位はN-5°-Eである。

溝

SD1 (第8～10図)

調査区の南寄りで検出した。西壁中央付近から南東へ約10m延び、東へ折れた後、約3mで調査区東壁に至る。後述するSK70とSP20に先行する。上面幅は約0.5m程度であるが、東へ折れる付近から狭くなり、東壁沿いでは約0.2m程度である。底面幅は約0.4mを測り、断面形状は緩や

かなU字形を呈する。深さは0.15m程度であり、南西コーナー部が約0.2m程度と深い。埋土からは、土師器杯・甕の細片、須恵器杯・皿・壺・甕の細片などの遺物が出土している。



第7図 SB62 P-1、SP25土層断面図 (1/30)



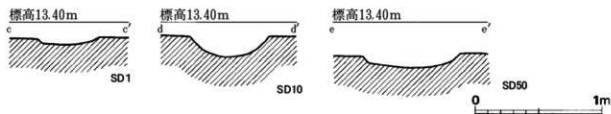
第8図 SD1 全景① (北から)



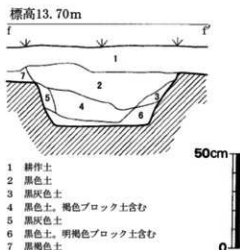
第9図 SD1 全景② (東から)

SD5 (第11・12図)

調査区の南部分を横切る形で検出した東西溝である。調査区の幅である6m程度を検出した。上面幅は0.3～0.4m程度で、底面幅は約0.2～0.3mを測り、断面形状は緩やかなU字形を呈する。深



第10図 SD1・10・50断面図 (1/30)



第11図 SD 5土層断面図 (1/20)



第12図 SD 5全景 (東から)

さは0.2m程度であり、西側へ向かって緩やかに傾斜している。黒色砂質土の埋土からは、土師器
 杯・皿・埴・甕の細片、須恵器皿の細片、黒色土器A類の細片など少量の遺物が出土している。

SD 10 (第10・13図)

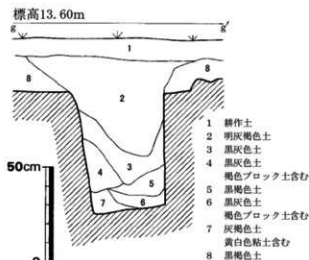
調査区の中央付近から南へ延びる南北溝である。後述するSD 20付近から南方へ約10m確認
 できたが、さらに調査区外へ延びるものと思われる。前述したSD 1とは、溝の芯々距離で約
 3.7mの距離を保ち平行して確認された。しかし、SD 1のように南部分が東へ折れるかは確
 認できなかった。上面幅は約0.6m、底面幅は
 約0.4mを測り、断面形状は緩やかなU字形を
 呈する点はSD 1とほぼ共通し、埋土も類似し
 ていたため、同時期の所産である可能性が考え
 られる。深さは約0.1mを測り、埋土からは土
 師器杯・甕の細片が少量出土している。



第13図 SD 10全景 (北から)

SD 20 (第14・15図)

調査区の中央付近を東西に横切る形で検出した
 東西溝である。重複関係から、前述したSD 1と
 SD 10に後出することが判明している。東西方向
 へ約6m確認できたが、さらに調査区外へ延びる
 ものと思われる。上面幅は約0.5m、底面幅は約
 0.4mを測り、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。
 断面形状は方形に近く、深さは約0.65mと深い。



第14図 SD 20土層断面図 (1/20)

埋土は褐色系の砂質土で、土師器坏・皿・埴・甕・瓶・土鍋の細片、須恵器坏・甕・すり鉢の細片、黒色土器A類の細片、龍泉窯系青磁皿の底部、古瓦細片などが出土している。

SD30 (第16図)

調査区の北壁沿いで検出した東西溝である。重複関係から、後述するSF3980に後出する。東西方向へ約6m確認したが、北端部は調査区外に広がるために上面幅や底面幅は不明である。検出できた部分は最深部で約0.8mを測る。埋土は褐色系の砂質土で、土師器坏・皿・埴・甕・瓶・鉢・土鍋・移動式カマドの細片、須恵器蓋・坏・高坏・壺・甕の細片、黒色土器A類の細片、龍泉窯系青磁皿の底部、石鍋の細片、古瓦細片などが出土している。出土遺物の年代や位置関係などから、東方約30m付近で実施した第212次調査検出のSD4の延長部である可能性が考えられる。

SD50 (第16図)

調査区の北寄り、SD30の南側約2m付近で検出した東西溝である。重複関係から後述する

SF3980に後出する。東西方向へ約6m確認したが、さらに調査区外へ延びるものと思われる。上面幅は約0.6～0.9m、底面幅は約0.4～0.8mを測る。断面形状は緩やかなU字形を呈し、深さは約0.15mである。埋土は単一の褐色系砂質土で、土師器坏・皿・埴・甕・土鍋・すり鉢の細片、須恵器坏・甕の細片、黒色土器A類の細片、龍泉窯系青磁碗の口縁部、磁石片などが出土している。

土坑

SK70 (第17図)

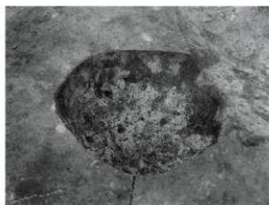
調査区の南部分、SD1のコーナー部分で検出した土坑である。重複関係から前述したSD1に後出する。平面プランは楕円形を呈し、長軸長約1.0m、短軸長約0.9mを測る。底部はすり鉢状を呈し、最深部で約0.4mを測る。埋土は黒褐色系の砂質土で、土師器坏・甕の細片が少量出土している。9世紀中頃の所産と思われる。



第15図 SD20全景 (東から)



第16図 SD30・50全景 (東から)



第17図 SK70全景 (南から)

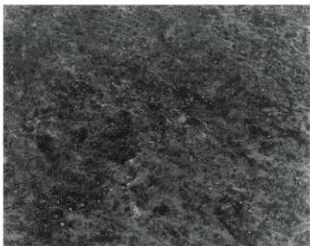
道路遺構

S F3980 (第18～22図)

調査区の北部分で検出した。筑後国府域の中央付近を東西方向に直線的に敷設されたS F3980と思われる。東側約30mで実施した第212次調査や北側隣接地で実施した第243次調査でも検出しており、走行方位は一致する。今回は、北壁から南側へ約9m分を検出した。前述したSD30・50に切り込まれているため、下限を14世紀頃を求めることができる。検出面では側溝などは確認できず、黒色土や褐色土に、黄色・白色粘土、砂礫や遺物細片を混入させた積土が確認できた。部分的に硬化面も確認でき、比較的遺構の残りは良好であると思われる。今回は、調査区の東壁沿いに幅約1mのトレンチを設け、路床部分までの掘り下げを実施した。掘り下げの結果、地山面は凹凸が激しく、特に南端部が著しい。土層断面観察の結果、凹凸の激しい地山面から5cm程度が砂礫や遺物細片で緻密に突き固められており、道路遺構下部における地業痕跡と判断される。また、北壁から1.5m付近で幅約0.5m、深さ0.2m程度の溝状の掘り込みが確認された。周辺における調査では、S F3980は2時期の存在が指摘されており、それらの所見を勘案すると、この掘り込みは古段階の南側溝の可能性もある。その後、この掘り込みを埋め戻した後、南側へ路面を拡幅する中で施した地業痕跡が、南端部付近で確認されたものと判断したい。また、新段階の道路遺構は南側へ約7m拡幅されていると思われるが、北側で実施されている第243次調査の所見と合わせると、路面幅が20mを超える。遺構の残存状況が悪いために詳細は不明であるが、20mを超える道路遺構となると、その意味を含めて、今後、検討しなければならない。積土や地業土からは、土



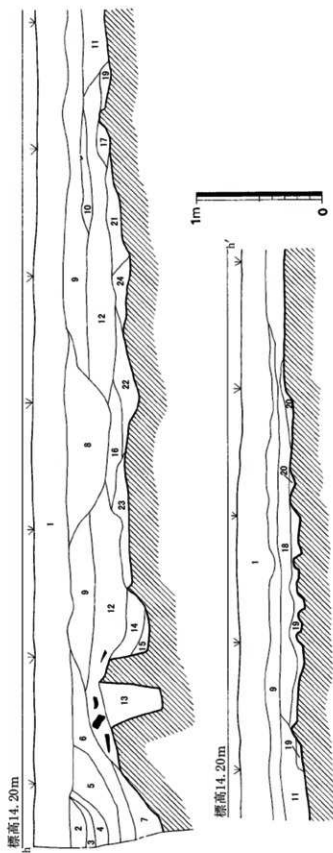
第18図 S F3980検出状況 (北東から)



第19図 S F3980硬化面 接写 (南から)



第20図 S F3980トレンチ全景 (北から)



第22図 SF 3980土層断面図 (1/30)



第21図 SF 3980土層堆積状況 (南西から)

- | | |
|-----------------|--------------------|
| 1 耕作土 | 13 黒色土、褐色土含む |
| 2 褐色土 | 14 明黒褐色土、褐色粘土含む |
| 3 明褐色土、黄色粘土含む | 15 黒色土、暗褐色土多く含む |
| 4 やや暗い褐色土 | 16 黒褐色土、硬化土含む |
| 5 黒褐色土 | 17 黒褐色土 |
| 6 暗褐色土 | 18 黒色土 |
| 7 黄褐色土 | 19 黒灰色土、遺物小片を含む硬化土 |
| 8 褐色土 | 20 灰黒色土、しまり強い |
| 9 暗褐色土 | 21 黒色土、やや硬化 |
| 10 黒色土 | 22 黒色土、遺物小片を含む硬化土 |
| 11 黒褐色土 | 23 黒灰色土、やや硬化 |
| 12 暗褐色土、しまり強く硬化 | 24 灰褐色土、硬化 |

師器蓋・坏・皿・埴・托・甕・移動式カマド・土鍋・すり鉢の細片、須恵器坏・高坏・壺・甕の細片、黒色土器A・B類の細片、緑釉陶器細片、越州窯系青磁碗・白磁の細片、滑石片、古瓦などが出土している。

ピット

SP25 (第7図)

SD1と重複して検出した。平面形は長軸長約0.6m、短軸長約0.4mの楕円形を呈し、深さは約0.65mを測る。柱痕が確認されたため断面観察を行った結果、約10°の角度で立てられていたことが判明した。現状では構造物を構成するものとは判断できないが、西側などで関連する柱穴などが検出される可能性も考えられる。埋土からは土師器坏・甕の細片、黒色土器A類の細片が出土している。

SP35 (第23・24図)

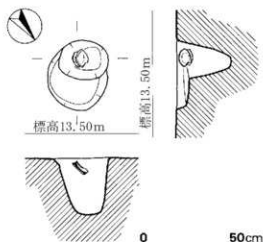
SD1のコーナー部北側付近で検出した。平面形は長軸長約0.4m、短軸長約0.3mの楕円形を呈し、深さは最深部で約0.3mを測る。埋土からは、油煙の付着した土師器坏の口縁部、埴・甕の細片が出土した。

SP40 (第25図)

前述したSP35の東側で検出した。平面形は長軸長約0.4m、短軸長約0.3mの楕円形を呈し、深さは約0.3mを測る。遺構の南壁に沿って、土師器皿が流れ込むような状態で検出された。埋土からは土師器坏の細片、甕の口縁部が出土している。

3. 出土遺物

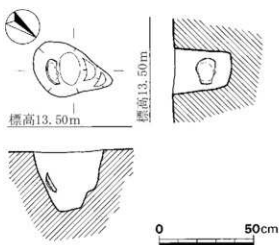
今回の調査では多くの遺構を検出することができた。特にSF3980の積土からの出土量が多く、総量はパンコンテナに5箱程度である。紙面の都合上、個々の遺物について説明は加えないため、詳細は第2表の出土遺物観察表を参照されたい。



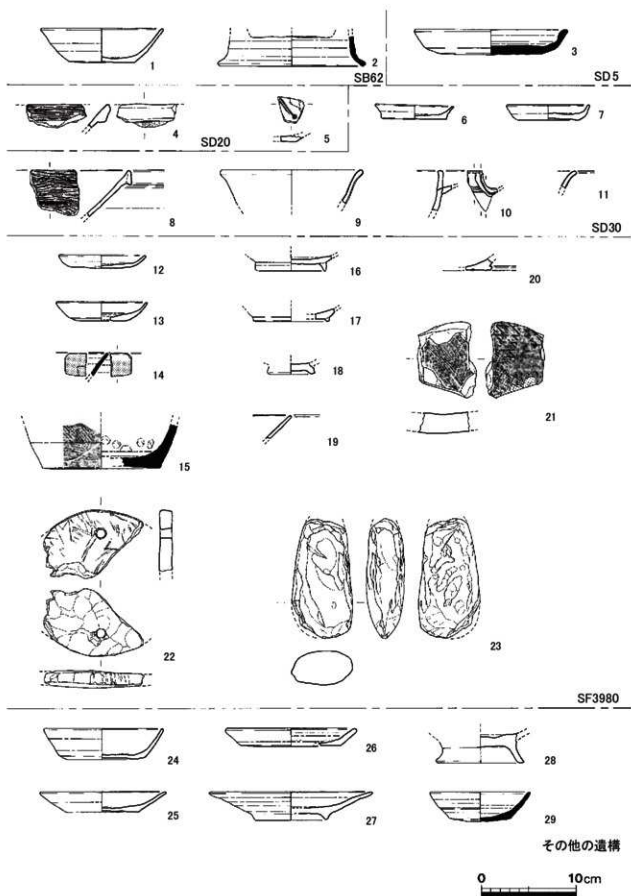
第23図 SP35実測図 (1/20)



第24図 SP35遺物出土状況 (東から)



第25図 SP40実測図 (1/20)

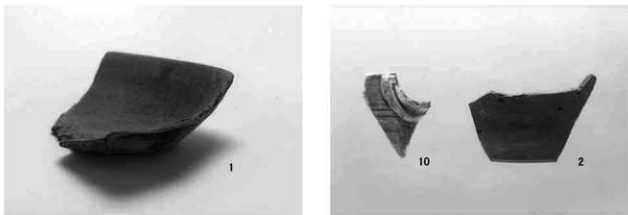


第26図 出土遺物実測図 (1/4)

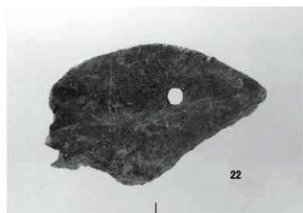
第2表 出土物観察表

遺物番号	出土遺構	種別	器形	法量			色調		調整		胎土	備考	遺物番号
				口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外面	内面	外面	内面			
1 第26回	S B 62	土師器	杯	(13.0)	(7.0)	3.7	にぶい にぶい黄	にぶい	同転ナデ へう切り	同転ナデ	ほぼ精良	外面に煤	201112-14
2 第26回	S B 62	酒器	円面碗	—	(15.6)	(3.2)	灰	灰	同転ナデ	同転ナデ	少量の黒色粒子含む	断面部に透かし	201112-13
3 第26回	S D 5	酒器	皿	(16.2)	(11.0)	2.7	灰 灰白	灰白～黄灰 灰	同転ナデ へう切り	同転ナデ	少量の黒色粒子含む 『黒土、黒色の土器など』	内外面に黒痕	201112-2
4 第26回	S D 20	土師器	土鍋	—	—	(2.5)	黒	にぶい	同転ナデ 刷毛目	同転ナデ 刷毛目	ほぼ精良	外面に煤	201112-3
5 第26回	S D 20	青磁	皿	—	—	(0.7)	灰白 浅黄	灰白	同転ナデ へう切り	同転ナデ	精良	龍泉窯系 1～2期か	201112-4
6 第26回	S D 30	土師器	小皿	8.4	6.9	1.4～1.6	にぶい	にぶい	同転ナデ へう切り	同転ナデ	ほぼ精良		201112-8
7 第26回	S D 30	土師器	小皿	8.8	6.4	1.7	にぶい	にぶい	同転ナデ へう切り	同転ナデ	ほぼ精良		201112-9
8 第26回	S D 30	土師器	土鍋	—	—	(5.0)	灰黄 灰	にぶい	同転ナデ	同転ナデ	砂粒(長石・石英・ 雲母など)含む	外面に煤	201112-7
9 第26回	S D 30	青磁	碗	(15.1)	—	(3.7)	灰オリーブ	灰オリーブ	施釉	施釉	ほぼ精良	龍泉窯系 龍泉寺不明	201112-5
10 第26回	S D 30	青磁	水注ぎ	—	—	(4.4)	浅黄～ 刷毛目	浅黄～ 刷毛目	施釉	施釉	精良		20112-6
11 第26回	S D 30	青磁	碗	—	—	(1.9)	灰	灰	施釉	施釉	ほぼ精良	龍泉窯系	201112-12
12 第26回	S F 3980	土師器	皿	9.2	6.7	1.9	黄、にぶい にぶい黄	灰黄 灰	同転ナデ へう切り	同転ナデ	赤色粒子含む	板状注痕 内外面に黒痕	201112-30
13 第26回	S F 3980	土師器	皿	(8.6)	(6.2)	2.0	にぶい にぶい	黄	同転ナデ へう切り	同転ナデ	少量の赤色粒子含む		201112-19
14 第26回	S F 3980	酒器	杯	—	—	(2.5)	施釉 灰	施釉 灰	同転ナデ	同転ナデ	精良	内外面に黒痕	201112-21
15 第26回	S F 3980	酒器	盃	—	—	(12.6)	灰白	灰白	同転ナデ ナデ、ケズリ	同転ナデ ナデ	少量の黒色粒子含む	内面に割注痕	201112-28
16 第26回	S F 3980	鉢・碗	皿	—	—	(1.7)	灰黄	灰黄	同転ナデ ナデ	同転ナデ ナデ	黒色粒子含む		201112-22
17 第26回	S F 3980	鉢・碗	皿 or 碗	—	—	(8.0)	灰黄 にぶい黄	灰黄	同転ナデ	同転ナデ	ほぼ精良		201112-24
18 第26回	S F 3980	白磁	碗	—	—	5.0	灰白	灰白	同転ナデ ナデ	施釉	精良	割注し高付	201112-20
19 第26回	S F 3980	青磁	碗	—	—	(2.5)	灰黄	灰黄	施釉	施釉	精良		201112-25
20 第26回	S F 3980	青磁	碗	—	—	(1.3)	灰白	にぶい黄	同転ナデ へう切り	施釉	少量の黒色粒子含む	円盤状高台 施釉部、口縁部	201112-26
21 第26回	S F 3980	瓦	平瓦	(8.0)	(6.0)	(2.1)	灰、灰黄	—	赤目	タタキ (御鈴子)	ほぼ精良	凸面に 施釉	201112-27
22 第26回	S F 3980	石製品	石製加工品	(7.1)	(9.2)	(1.3)	灰 施釉	—	ケズリ	ケズリ		滑石製、全体に黒 色注痕、口縁部	201112-23
23 第26回	S F 3980	石製品	石形	(12.6)	6.5	3.8	灰白 にぶい黄	—				蛇文割製	201112-18
24 第26回	S P 63	土師器	杯	12.7	9.1	3.2	灰黄 灰	にぶい黄 にぶい	同転ナデ へう切り	同転ナデ	少量の赤色粒子含む	内外面に煤 板状注痕	201112-15
25 第26回	S P 40	土師器	皿	13.4	7.7	2.2	にぶい	黄	同転ナデ 同転ナデ	同転ナデ ナデ	赤色粒子含む		201112-11
26 第26回	S P 90	土師器	皿	(13.4)	(10.6)	1.9	灰黄 にぶい	灰黄	同転ナデ へう切り	同転ナデ	少量の砂粒(長石・石英・ 雲母など)含む		201112-16
27 第26回	S P 35	土師器	脚付皿	(17.2)	(7.5)	3.1	黄、にぶい 灰	黄	同転ナデ へう切り	同転ナデ	赤色粒子含む	外面に黒痕	201112-17
28 第26回	S P 35	土師器	皿	—	—	(3.2)	にぶい	灰黄	同転ナデ へう切り	同転ナデ	ほぼ精良 (黒色含む)		201112-10
29 第26回	S P 2	酒器	杯	(10.7)	(6.6)	3.2	灰白	灰白	同転ナデ	同転ナデ	黒色粒子含む	板状注痕	201112-1

※輸入陶磁器の分類は、太宰府市教育委員会2000『太宰府桑坊XV 陶磁器分類編』太宰府市の文化財第49集による。



第27図 出土遺物(写真①)

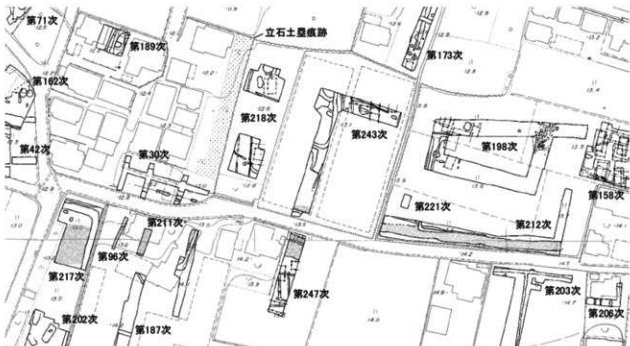


第28図 出土遺物 (写真②)

IV. 総 括

今回の調査では、奈良・平安時代、中世に属する掘立柱建物3棟、溝6条、土坑1基、道路遺構1条などの多くの遺構を検出することができたが、ここでは周辺の調査成果と合わせて、古代の主要遺構について、得られた所見をまとめておきたい。

S B15・62・80などの掘立柱建物3棟は、詳細な築造時期は不明であるが、掘方形状などから9世紀代に属し、重複関係からSD1に先行する9世紀前半～中頃の所産と思われる。棟方向の違いはあるものの、計画方位はN-5°-E～N-17°-Eと近く、比較的近い時期に造営された可能性も考えられる。小規模な官衙群、もしくは官人居住域を構成する建物群と考えたい。調査区中央部で検出されたSD1・10は、一定の距離を保ち平行して掘削されており、出土遺物から9世紀中頃の所産と考えられる。小規模な道路遺構の側溝や何らかの区画溝などの可能性が考えられるが、SD1とSD10の間では、硬化面や道路遺構に伴うような地業痕跡は確認できていない。SF3980は周辺における調査の結果、大きく2時期の存在が指摘されている。古段階は側溝を伴う点は各調査で一致しているが、路面幅は約6.6～10mと異なる。本調査区に近い第212次調査地点では約10mと指摘されており、今回の調査区の北側で実施された第243次調査SD150を北側溝、トレンチ北部分で検出した掘り込みを南側溝と見れば、約10mとなり第212次調査で得られた所見と一致する。新段階への移行時期については、第217次調査では9世紀代と指摘されているが、今回は前述したように約20mを超える大規模な路面幅が想定されるに至った。しかし、幅約20mの道路が存在していたのか、路線に若干の移動が生じ、結果的に幅約20mの範囲が道路遺構と認識されるに至ったものか、今回は判断できなかった。今後の調査に期待したい。また、SF3980の地業土や積土に混入していた遺物は、8世紀中頃～10世紀前半までが主体を占める。第217次調査ではSF3980の廃絶年代は10世紀代とされており、今回の調査でも同様の結果を得ることができたものと考えられる。



第29図 第247次調査地周辺の主要遺構模式図 (1/1,500)

報 告 書 抄 録

ふりがな	ちくごこくふあと だい247じはつくつちょうきほうこく		
書 名	筑後国府跡 ー第247次発掘調査報告ー		
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書		
シリーズ番号	第320集		
編 著 者 名	神保公久		
編 集 機 関	久留米市役所 市民文化部 文化財保護課		
所 在 地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15番地3 TEL 0942-30-9225 FAX 0942-30-9715 Email : bunkaza@city.kurume.fukuoka.jp		
発 行 年 月 日	平成24年(2012) 7月31日		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	発掘期間	発掘 面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
筑 後 国 府 跡 第247次調査	久留米市 合川町168番1	40203	30112	33° 18' 51"	130° 32' 37"	20111011 } 20111111	197㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種 別	時 代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
筑 後 国 府 跡 第247次調査	官衙	奈良 ～平安	掘立柱建物	3棟	土師器、須恵器、黒色土器、 瓦器、緑釉陶器、輸入陶磁 器、石製品、鉄製品、古瓦			筑後国府城を東西に敷 設された官道の一部を 検出した。官道南側で は3棟の掘立柱建物が 検出された。また区画 や道路遺構の側溝の可 能性のある溝も検出し ている。
	集落	鎌倉 ～室町	土坑	1基				
要 約								
第247次調査は、筑後国府Ⅱ期政庁に付随する国司館（9世紀）の東側約120m付近にあたる。周辺で実施された調査では、筑後国府城を東西走行する官道が検出されており、今回もその一部が検出されるものと想定された。調査の結果、調査区内において幅約9m分を検出することができ、大きく2時期の存在が想定された。周辺の調査結果と合わせると、古段階は道路幅約10m、新段階は道路幅約20mを測る。この道路遺構の南側では、3棟の小規模な掘立柱建物と区画溝、もしくは道路遺構の側溝の可能性のある溝などを検出しており、調査区周辺には小規模な官衙域や役人の居住域が展開しているものと思われる。調査地周辺の調査では、中世の遺構も多く検出されているが、今回も13～15世紀代の溝を検出することができた。								
土木工事の届出日			平成23年10月11日			遺物の発見通知日		平成23年11月16日 (23文財第806号)

筑後国府跡

—第247次発掘調査報告—

久留米市文化財調査報告書 第320集

平成24年7月31日

発行：久留米市教育委員会
編集：久留米市 市民文化部 文化財保護課
印刷：香和印刷株式会社
久留米市津福本町2320-15